

二十九年年度日帰り研修

若き廣瀬淡窓が日田く佐伯に
旅立ちしその足跡を辿る

吉田 勝 重

(会員 佐伯市女島)

平成二十九年年度の第一回日帰り研修が実施された。前日までの雨もあがり、晴天のもと「若き廣瀬淡窓が歩いた佐伯への道」を辿る。

四月十六日、文化会館前駐車場に集合、七時半過ぎ日田へと出発した。参加者は二十九名。

若き日の廣瀬淡窓は、寛政七年（一七九五）旧暦四月朔日、秋風庵（現日田咸宜園）を出発し、天ヶ瀬から宮ノ原の鏡池を経て肥後黒川へ、阿蘇・久住の山を望みながら竹田に、竹田に三日間滞在し岡藩の菩提寺を訪問する。その後、三重市場から中の谷峠を越え、四月八日に佐伯に到着している。佐伯に到着した淡窓



廣瀬淡窓 14 歳の佐伯行経路

は、佐伯城下の米屋七兵衛宅に滞在している。(米屋七兵衛の手紙より)

淡窓十四歳の時の事である。この事は作者の自伝、『懐旧楼筆記』に書かれている。

一、咸宜園と秋風庵

広瀬淡窓が佐伯への旅立ちの出発点とした「秋風楼」は、天明元年（一七八二）淡窓の叔父、廣瀬平八（月化）が、淡窓の生まれる前年に建てた居宅である。「秋風庵」は松尾芭蕉翁の「あかあかと日はつれなくも秋の風」から付けられたそうである。秋風庵は東西八間半、南北三間半、茅葺きの二階建である。この建物で咸宜園の話聞いた。



咸宜園で淡窓が塾を開校してから今年が二百年目に当たる。国の史跡になって十余年が建っているそう
だ。

廣瀬淡窓は天明二年（一七八二）四月十一日に、日田豆田魚町の商家廣瀬家で、父三郎右衛門（長春庵桃秋）、母ゆいゆいの長男として生まれた。六歳まで叔父月化のもとで育ち、八歳の時に長福寺の法幢上人のもとで学習する。幼い時から病弱であったため、父が学問の道に進ませようと各地に遊学させようとしていた。

その一つが十三歳の時まで学んだ先生（松下筑陰）に逢う為の旅立ちである。

淡窓は廣瀬家に寄寓していた松下西洋（筑陰）や豆田町の医師椋野元俊むくのもととしや頓宮四極とんぐうしききよく（油屋三郎兵衛）、広円寺の法蘭上人ほうらんじんのうじん、筑前の亀井南冥かめいなんめいのもとで学習している。

二十四歳の時、日田長福寺学寮を借りて塾を開き、二年後二十六歳の時、豆田浦町に桂林荘（園）を新築移転、三十六歳の時、堀田村に咸宜園かんぎえんを開いている。「咸宜」とは中国の詩経の文鳥ぶんちようよりとった言葉で「みなよろし」という意味である。身分や学歴や年齢に関係なく誰でも入門できる塾であった。

この事は、淡窓の教育への考え方にあらわれている。「淡窓いろは歌」の「す」の項に「鋭きも鈍きもとに捨てがたし 錐きりと槌ちちとに使いわけなば」と書かれている。

二、淡窓の佐伯行き

淡窓の旅立ちには、従者一人を従えただけの旅で、病弱な淡窓の初めての長旅だった。この時の旅を想起して、嘉永三年（一八五〇）六月『懷旧樓筆記 五十六卷』に「若き日の追憶」として記している。この旅の途中の様子を十編の漢詩に表している。

その代表作は三狼の詩の一つと言われる「中ノ谷峠の寂しい様子を詠んだ歌」であろう。

中谷寥寥人行

陰雲堆裏宿柴荆

乳狼夜半来尋食

一径菅茅踏有声

中谷寥寥 人行かず

陰雲堆裏 柴荆に宿る



中ノ谷の狼

乳狼にゅうろう 夜半に來りて

食を尋め 一径いつけいの菅茅かんぼう 踏んで声あり

中ノ谷峠を越える時、人の通らぬような深山の一本道を草を踏み分け通って行った事、夜、狼が食を求めて通りすぎる時の寂しさ、佐伯に入るまでの過程を著している。
(懷旧樓筆記 卷五)

二つ目は、初めて佐伯の町に到着した時の詩であろう。

鶴城樓閣海之濱

松緑沙明不起塵

こさず

百浦魚塩民自富

風帆相接浪華津

百浦ひやうぼの魚塩 民自ら富む

風帆相接浪華の津

鶴城の樓閣海の濱

松は緑に沙明すならかにして塵ちりを起



佐伯の町に入り、初めて見た様子を漢詩に書いている。

内容は「鶴城の楼閣は海のほとりにある。松の緑、白い砂の眺めは清らかで美しい。浦々には魚が捕れ、塩が作られ住民は富裕にすこす。風をはらんだ船が大坂の港と繋がっていそがしく通行する。」となっている

(懐旧楼筆記 卷六)

その後、淡窓は松下筑陰の所に下宿し、三ヶ月の間藩校四教堂に通っている。その様子を歌った詩である。

絃歌淡蕩動薰風

絃歌淡蕩として薰風を動かす

公殿南連泮水宮

公殿南に連なる泮水宮

身作國師門下客

身は國師門下の客と作り

遊居三月在城中

遊居三月城中に在り

(懐旧楼筆記 卷七)

その内容は「音楽・歌声がゆるやかにのんびりと響



き、香りの良い風が吹く。公の殿堂が南につらなるのは藩の学校四教堂である。自らは藩校師匠松下筑陰の門下生となつて、早三ヶ月。城内で過ごしている。」

卷八には、

西谷南臺日走趨

西谷南臺日に走り趨く

無人迎送不文儒

人迎送するに文儒ならざる

無し

青雲別有憐才者

青雲別して才を憐れむ有らば

数接安齋賢太夫

数 安齋賢太夫に接せしむ

と書かれている。

西谷南台は城下の小名である。日々駆けめぐつて働いた。送り迎えるもの全て、文人儒者であった。若者で青雲の志の優れた者があると、安齋賢太夫(家老梶西金左衛門)に引き合わせた。という内容の詩である。(懐旧楼筆記 卷八) 卷九には羽明山龍護寺下の川に竿をさして川船で絵師が川面に映る月を愛でながら興じている様子が詩に歌われている。

羽明山下水初波

羽明山下 水 初めて波うつ

龍護寺前移棹過

龍護寺の前棹を移して過ぐ

幾隊畫船齊浮月

幾隊の画船 齊しく月に浮く

繁絃争奏竹枝歌

はんげんそうそう ちくし
繁絃争奏す竹枝の歌

(懐旧楼筆記 卷九)

卷十には、故郷日田に帰つて二十年程経た頃の事を

漢詩にしている。その懐旧楼筆記には

桑梓帰来二十年

桑梓帰来二十年

偶談往時淚潸然

偶、往時を談じて淚潸然たり

君言龍鼎山前路

君、龍鼎山の前路を言うに

古墓新墳草似煙

古墓新墳、草煙に似る

「たまたま昔の事を話すと、しきりに涙が落ちてくる。

君が龍鼎山養賢寺の前の道の話をする、古い墓や新

しい塚に眠る故人を思い出して、あたりの草が煙のよ

うにたなびき繁つていたのを思うといたましい。」と

記している。

三、宮ノ原の鏡ヶ池伝説と下城の銀杏

淡窓は、天ヶ瀬より宮ノ原に出ている。ここ小国町

宮ノ原は、江戸時代細川藩の参勤交代で賑わい酒や醬

油などの商店が建ち並らび、多くの人々が行き来して

いたという。真つ白な漆喰しつくいの白壁の蔵が当時を思い起

こさせる。



この宮ノ原には「鏡ヶ池伝説」の話が伝わっている。

醍醐天皇の孫娘小松一院は、横笛の名手である清原

正高に密かに心を寄せていましたが、帝の怒りに触

れ、豊後の国とに因幡の国に離されました。小松女院

は侍女十一人を引き連れ、正高のいる豊後に向け旅立

ます。流浪漂泊の末、この宮ノ原に辿り着きます。祠

の下の吹き出す清らかな泉に、正高を慕う己の姿を映

し出す鏡を神仏に捧げ投げ入れます。女院の心を察す

る侍女も、おのおの鏡を池に投げ再会できるよう祈

ります。その後、村人達がこの池を「鏡池」と呼ぶよ

うになりました。長年の疲労で乳母がこの地で亡くな

ります。墓印として植えられたのが「下城の銀杏」で

す。再び旅に出た女院は玖珠にて正高と出逢います。

しかし、正高に妻が居ることを知り三日月の滝(織月

滝洞)に入水して果てます。(小国郷史より)

この平安時代の悲恋物語を裏付けるように泉の中

から鏡が発見されて

いる。淡窓がこの地を通った時話を聞いたと思われるが淡窓はどのように思ったのであるうか。

今では地域の生活用水として使われ、最近では、「愛しい人に再会できるように願う泉」とか、「宝くじが当たる福運の泉」として有名である。



淡窓はこの後黒川を経て竹田に到着している。黒川までは一里半、竹田までは九里の行程である。

四、竹田・岡藩の菩提寺「碧雲寺」を訪う

竹田では岡藩中川家の菩提寺「碧雲寺」を訪問した。妙心寺に属するお寺は、稲葉川沿いの静かな地にあり「おたまや公園」と呼ばれている。慶長十七年岡藩初代藩主中川秀成がお茶屋として建て始めましたが、途中で亡くなった為、二代藩主久盛が菩提寺として造ったものである。

境内には、初代秀成ひでなりの他、二、四、五、六、九、十一、十二、十三代の墓がある。東京にある菩提寺東禅寺に残りの藩主とその奥方、子どもたちの墓がある。中川氏は明治四年東京に移り、それ以後の墓地は青山墓地にある。

碧雲寺おたまや公園の藩主のお墓は、佐伯藩の菩提寺養賢寺の毛利家藩主のお墓より小ぶりであったが一つ一つが仕切られている立派なものである。



中川家藩主の墓地

墓地はその当時の様子を知る遺跡である。竹田(岡藩・中川家)や延岡(県藩・内藤家)のように自由に訪問できる事が良いと思った。

淡窓は碧雲寺の額について話を残している。

また、竹田での逗留を「懷旧樓筆記卷四」に次のような詩を残している。

千巖万壑入岡藩

せんがんまんがく 千巖万壑岡藩に入る

士庶肩摩道陌喧

しじょ 士庶して肩摩道陌 喧かまびすし

絶壁雲懸公子館

ぜつ 絶壁 雲は懸る 公子の館

断崖泉落大夫門

だんが 断崖 泉は落つ 大夫の門

訳すると、多くの岩や崖に囲まれた岡藩に入った。武士を始め一般の人たちが肩をすりあわせるように多く、どの道を通っても賑やかである。絶壁の上に雲がかかる程に高く構えた高貴な子弟の住居、断崖にかかる滝が落下する家老の邸宅などがある。

淡窓は、竹田で茶人であった古田織部の子孫、古田大作の所に投宿している。日田を出て四日目の事である。

五、咸宜園と佐伯藩四教堂

淡窓は、師であつた松下筑陰（西洋）に再び逢い教
えを受けようと、三十七里（一四八キロメートル）離
れた佐伯まで脚を運んだのである。

淡窓はここでも漢詩を詠んでいる。

佐伯國南疆 曾遊四教堂

奇書傾二酉 仙訣聚千方

吹浪江豚黒 連空海鯧蒼

先師墳墓在 夢裏或焚香

佐伯は國の南疆 曾つて四教堂に遊ぶ

奇書二酉を傾け 仙訣 千方より聚まる

浪を吹く江豚黒く 空に連らなりて海鯧蒼し

先師の墳墓在り 夢裏に或は香を焚く

訳すると「佐伯は豊後の國の南境にある。私はかつ
て四教堂に学んだことがある。貴重な書物で二つの書
庫は傾かんばかりに、詩書画の奥義などが内外から多
く集まつている。波を吹くイルカは黒く、空に連なつ
て鯧の群れは蒼い。恩師の墳墓もあり、夢の中で香を
焚いた。」となる。

佐伯に遊学してから二十年余り、淡窓の胸にはその



淡窓の書齋 遠思楼

にせり……」と考へ咸宜園建設に取り組んだとい
う。この事は懐旧楼筆記回想録の文化十三年の項に書
かれている。

この咸宜園での教育方針と方法は次の通りである。

一、三奪法（身分・年齢・学歴）

当時の恩師の姿が、ま
た、咸宜園で共に学ん
だ中島子玉への思い
等溢れていたのでは
ないだろうか。
咸宜園は、淡窓が三
十六歳の時に建てた
塾である。

以前の桂林荘（園）
は咸宜園から二丁ほ
ど離れた所にあり、
「耳目行き届かざる事
多し。是を以て規律嚴
ならず。遊惰の徒、常
に潰焉として自ら恣

二、若い内は学問せよ。自分の主義主張を通し研究せよ。儒教の教えを強要しない。

三、人間みなよろし。

四、階級制一〜九級（十八階級）。試験は階級により教科内容により異なる（二回〜九回）

合計点数が高くなったら上の級に上がる。

普通の人には五〜六級になるのに三年ほどかかっていた。（月旦評を作成・開示）

五、実学主義で、職人制（係担当）をも取り入れていた。詩作教育の重視もあった。

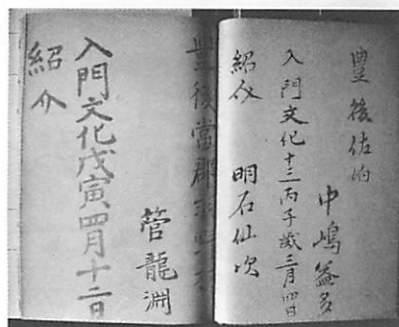
このようにして作られた咸宜園には、全国から四千六百十七人の人々が集まり、名簿に名を記している。佐伯からも中島子玉、古田豪作、秋月新太郎、楠文蔚など多くの人々が参加している。

中島子玉は、佐伯藩の鉄砲町に住む徒士出身であった。淡窓より二十歳下の若者であった。文化十三年（一八一六）咸宜園の前身である桂林園に古田豪作とともに入門している。古田豪作はその年の七月に病死した。

二人は桂林荘の双壁と呼ばれていた。

翌年咸宜園に移る。子玉は二年余りで六級になり、その英才ぶりから指導者としても活躍する。のち、藩の勧めで江戸昌平校に入学。帰国後は四教堂の教授となる。

この子玉が亡くなった時、淡窓はその死を嘆き、「益多（子玉）、前後あること三年、余、教授を以て事をなしてより、いまだかつて人材の斯くの如き俊（俊英）なるものを見ず。再遊の機またあるや否や。余は左右の手を失う如し」と日記に記している。



豊後佐伯

中嶋益多

入門文化十三

丙子歳三月四日

紹介 明石仙次

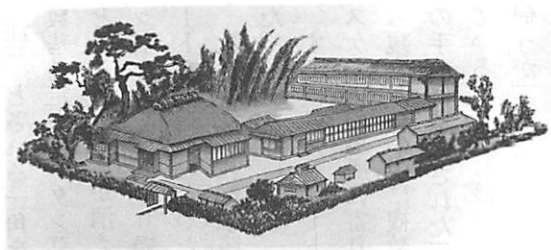
豊後當郡羽野村

管 龍淵

六、研修旅行を終えて

このようにして私たちの研修旅行は終了した。会員以外にもお願いし二十九名の方が参加した。車中で一人一人から研修旅行への感想を頂いた。最後にその思いを記しておこう。

- ・山桜が綺麗であり、今回初めての所もあり良かった。
- ・十四歳の淡窓が、三十七里もの距離を歩いて佐伯まで来たという。淡窓はどんな人だったのだろうか。すばらしい人だったと思う
- ・楽しかった。良かった。今後も是非参加したい。
- ・鏡池が美しかった。
- ・お寺（碧雲寺）のボタン桜をお酒に浮かべて飲んでみたかった。体力不足を感じた。
- ・頭の良い人は短命だなあと思った。
- ・中の谷峠は若い頃バスで通ったことがある。急な道で怖い思いもした。中の谷は「泣く峠」とも言い、八七九メートルの長さがある。
- ・黒川温泉にも行った事がある。当時はどうだったのだろうか。これからも宜敷。



- ・新しい企画が計画されたら、また知らせて下さい。
- ・新しい事を行う事はすばらしい。道を切り開いた人々はどんな人か。先人の苦勞を思うとすばらしいと思った。
- ・楽しい研修旅行の一日であった。